

(首卷)

十六、村木ノ取出攻めらるゝの事

一、去程に、駿河衆岡崎に在陣候て、鳴原シキワラの山岡構攻干乗取、岡崎より持つゞけ、是を根城にして小河の水野金吾構へ差向ひ、村木と云ふ所、駿河より丈夫に取出を相構へ、駿河衆楯籠り候。並寺本の城も人質出し、駿河へ荷担かたん仕り、御敵にまかりなり、小河への通路取切り候。御後卷うしろまきとして、織田上総介信長御発足はつそくたるべきの旨候。併しかしながら、御敵

清洲より定て御留守に那古野へ取懸け、町を放火させ候ては如何と思食おほしめし、信長の御舅にて候齋藤山城道三かたへ、番手ばんての人数を一勢こひ乞に遣はされ候。道三かたより、正月十八日、那古野留守居として、安東伊賀守大将にて、人数千ばかり、田宮・甲山・安斎・熊沢・物取新五、此等を相加へ、見及ぶ様躰やうたい、日々注進候へと申し付け、同事に正月廿日尾州へ着越候キ。居城那古野近所志賀・田幡兩郷に陣取をかせられ、廿日に、陣取御見舞として信長御出で、安東伊賀に一礼仰せられ、翌日後出陣候はんの処、一長イチヲトナの林新五郎・其弟美作守兄弟不足を申立まうしたて、林与力あらこの前田与十郎城へ罷退まかりのき候。御家老の衆、いかゞ御座候はんと申候へども、左候共苦しからずの由、上総介仰せられ候て御働まはき。其日

はものかはと云ふ御馬にめし、正月廿一日あつたに御泊り。廿二日もつてのほか以外、大風候。御渡海成間敷なるまじきと主水かこ・楳取かんどりの者申上候。昔の渡辺・福嶋にて逆櫓争ふ時の風も是程こそ候らめ。是非に御渡海あるべきの間、舟を出し候へと、無理に廿里ばかりの所只半時ばかりに御着岸。其日は野陣のちんを懸けさせられ、直すくに小川へ御出で、水野下野守に御参会候て、爰許こゝもと様子能々きかせられ小川に御泊。

一、正月廿四日払暁に出でさせられ、駿河衆楯籠候村木の城へ取懸け攻めさせられ、北は節所手あきなり。東大手、西搦手からめでなり。南は大堀霞むばかりかめ腹にほり上げ、丈夫に構へ候。上総介信長、南のかた攻めにくき所を御請取候うけとりて、御人数付けられ、若武者共我劣らじとのほり、撞落ツキされては又はあがり、手負・死人其数を知らず。信長掘端ほりばたに御座候て、鉄炮にて狭間はざま三ツ御請取りの由仰せられ、鉄炮取かへく放させられ、上総介殿御下知なさるゝ間、我もくくと攻上り、塀へ取付き、つき崩しく、西搦手の口は、織田孫三郎殿攻口。是又攻めよるなり。外丸そとまる一番に六鹿と云ふ者乗入るなり。東大手の方は水野金吾攻口なり。城中の者働事はたらくこと比類なき働きなり。然りといへども、透すきをあらせず攻めさせられ、城内も手負・死人、次第ついでく無人がにんになり、様々降参申候。尤もつとも攻干さるべき事に候へども、手

負・死人塚を築、其上既に薄暮に及び候の間、佗言の旨に
任せ、水野金吾に仰付けらる。信長御小姓衆歴々其員を知
らず手負・死人、目も当てられぬ有様なり。辰刻に取寄せ、
申の下刻迄攻めさせられ、御存分に落去候訖。御本陣へ
御座候て、それもくと御詫なされ、感涙を流させられ候
なり。翌日は寺本の城へ御手遣。麓を放火し、是より那古
野に至て御帰陣。一、正月廿六日、安東伊賀守陣所へ信長
御出候て、今度の御礼仰せられ、廿七日美濃衆帰陣。安藤
伊賀守、今度の御礼の趣、難風渡海の様躰、村木攻られた
る仕合、懇に道三に一々物語申候処に、山城申す様に、す
さまじき男、隣にはいやなる人にて候よと申したる由な
り。

東浦町誌より